

# 近世ヴェネツィアの貴族階級における新家系の成立

藤内哲也

【要約】 トルコとの戦争によって財政状況が悪化した一七世紀のヴェネツィアでは、貴族身分が「売却」され、厳格な閉鎖性を維持していた貴族階級に新家系が成立した。本稿では、約三世紀ぶりとなるこの現象を「社会的上昇」の観点から捉え、新家系の社会的・地理的出自や旧家系への統合の過程、権力構造における新家系の位置づけなどについて検討した。また、一五世紀中葉に始まる書記局官僚層形成からの一連の過程をエリート層の再編として考えることで、近世を通じての社会的上昇の類型としての連続性や類似性が看取される一方、権力構造に対する影響に関しては両者の意義に大きな差異がみられることが明らかとなった。しかし、この再編によっても都市・領域国家両面における二元的な権力構造は克服されず、それぞれを統合する単一のエリート層形成や上昇を保障するシステムが欠如していたことに、近世ヴェネツィアの構造的特質や限界を指摘することができるのである。

史林 八四巻六号 二〇〇一年一月

## はじめに

一七九七年五月、迫り来るナポレオン軍を前に大評議会の解散を決議したヴェネツィア共和国は、中世以来連続と続く歴史に自ら終止符を打った。そのときヴェネツィアの元首たるドージェの地位にあったのはロドヴィコ・マニンである。

共和国滅亡の瞬間を彩るのにふさわしいめぐり合わせであった。「枢機卿になるよりも難しい」といわれるほどの厳格な閉鎖性を維持していたヴェネツィア貴族階級にあって、マニン家は一六五一年になって貴族身分に加えられた新しい家系である<sup>②</sup>。ロドヴィコはその新家系出身最初の、そしてもちろん最後のドージェであった。

ルネサンスの輝きを失ったイタリアの近世、そしてヴェネツィアの近世は、まさに「衰退」や「没落」の時代である<sup>③</sup>。そのなかで、名実ともに共和政の伝統を放棄してメデイチ君主政へと変貌を遂げたフィレンツェをはじめとする他のイタリア諸国に対し、伝統的な貴族共和政体を維持するヴェネツィアにおいては、都市の「衰退」はそのまま支配層たる貴族階級の「衰退」に直結する。かつて地中海貿易の覇者として、その果敢な精神と都市への私心のない貢献が賞賛されたヴェネツィア貴族も、いまやそうした公共精神は希薄となり、公職に就くべき人材の払底が嘆かれるのである<sup>④</sup>。

こうしたヴェネツィア貴族共和政の根幹を蝕む「危機」を象徴するのが、マニン家のように一七世紀半ばから断続的に貴族身分を与えられた新家系の存在である。一三世紀末からの一連の連続性により法的身分として確立したヴェネツィア貴族階級が新たな成員を迎えるのは、ジェノヴァとの戦争に勝利した際、国家への貢献が著しかった三〇家の非貴族家系を統合した一三八一年以来、約三世紀の間絶えてないことであった。しかしこの特筆すべき事態は、これまであまり研究者の関心を惹いていない。もはや貴族階級の「衰退」は自明のことであり、その身分がついに「開放」されたとはいえず、新家系の成立はその「衰退」を端的に物語るエピソッドのひとつにすぎないのである。新家系出身者として初めてドージェに就任したL・マニンが共和国最後のドージェとなったという偶然の符合も、新家系の成立が貴族階級の「衰退」や「墮落」を印象づける効果を高めただけであつた。

しかしながら、新たな貴族家系の誕生は、ヴェネツィア史においてそれほど単純な意味しか持ち得ないのだろうか。固く閉ざされていたヴェネツィア貴族階級の扉が開かれた一六四六年以降、新たに貴族身分を獲得したのは一二七家に上る<sup>⑤</sup>。それに対して、一世紀ほど遡つた一五二七年の時点で貴族M・サヌートが『日記』に記した貴族の姓は全部で一四四しか

ない<sup>⑥</sup>。すなわち、一七世紀半ばからの新家系の成立は、結果として貴族身分に属する家系数を一挙に倍増させるほどのインパクトを持ったのである。もちろん、長い年月の間にいくつかの分家を派生させ、多くの成員を抱える旧来の貴族家系と、せいぜいおじや甥を含む程度の規模の小さな新家系とを同列に論じることができない。実際、新家系の加入は貴族人口の減少傾向に対する歯止めとはならなかった<sup>⑦</sup>。しかし、そうした多くの新規成員を迎える衝撃は決して無視しえるものではないだろう。単に「衰退」を象徴するエピソードとしてではなく、近世ヴェネツィア社会に切り込む出発点として、この新家系の成立という現象を取り上げる意義は小さくないのではないかと。

視点を変えてみよう。清水廣一郎氏は都市共同体が持つ二つの性質について指摘している。すなわち、地域を統合し編成する中心地としての機能を持ち、広い範囲から人々を受容する開放的な側面と、逆に共同体の運営において他者を排除し、限られた成員のみがそれに参加しうる閉鎖的な側面である<sup>⑧</sup>。こうした都市の「二面性」は、近世都市にも、そして「衰退」期にあるヴェネツィア社会にも妥当しよう。たとえば、断続的なペストの流行により減少した人口が着実に回復することに「開放性」を指摘することができようし<sup>⑨</sup>、先に触れた貴族身分の厳格な閉鎖性や、一六世紀の過程で進展したとされる寡頭政的な傾向は「閉鎖性」を如実に示すといえる<sup>⑩</sup>。

しかし、この「二面性」に加え、都市にはもうひとつ重要な性質があることも同時に考慮されるべきではないだろうか。それは、「開放性」と「閉鎖性」という相反する性質を結ぶ「社会的上昇」の場としての側面である。都市社会において広い範囲から受容された人々がどのような形で上昇を実現していくのか。このプロセスを解明することで、その社会の特質を明らかにすることも可能だろう。そして、近世ヴェネツィアにおける「社会的上昇」を体現する現象こそ、新貴族家系の誕生に他ならない。ならば、一七世紀以降に成立する新家系の上昇のあり方を考察することで、単なる「衰退」とは異なる視点から近世ヴェネツィア社会を論じることができるのではないだろうか。

とはいえ先にも述べたように、新貴族家系の成立について取り組んだ研究は決して多くはない。「衰退」するヴェネツ

イタリアの支配層たる貴族階級の「墮落」として捉える概説的な理解をおくとすれば、まず挙げられるのはJ・C・デーヴィスの研究である。しかし、貴族階級の「衰退」の要因として貴族人口の減少と指導層の人材不足を重視するデーヴィスは、新家系の出自や旧家系への統合過程を概観するものの、新貴族の加入が人口回復に貢献しなかったことを確認するにとどまり、それを積極的に意義づけようとはしていない。<sup>⑩</sup>

一方、近世都市の比較史的な観点からヴェネツィアをとりあげるのがP・パークとA・コヴァンである。両者の研究は、閉鎖性の強化やランティエ化といった近世都市支配層の一般的な傾向がヴェネツィアにも妥当することを示し、ヴェネツィア史研究をより広い文脈の中に位置づける意義を持つ。<sup>⑪</sup>しかし、エリート層の定義にはそれぞれ問題がある。まずP・パークはエリート層についてきわめて限定的に定義し、開放的なアムステルダムに対するヴェネツィア支配層の閉鎖性を強調する。<sup>⑫</sup>反面、そうした有力貴族層による寡頭政的支配に比して貴族階級自体の閉鎖性は重視されず、新家系の成立はヴェネツィア社会における「名誉の氾濫(inflation of honours)」の一環として捉えられるにすぎない。<sup>⑬</sup>だが、有力貴族層の閉鎖性は貴族階級内での上昇を排除するものであっても、より下層からの上昇を遮断していたのは貴族身分の閉鎖性に他ならない。よって、その障壁が開放されたときの上昇の可能性やエリート層内での動きについて検討するには、やはり新貴族の成立自体に焦点を合わせる必要がある。

これに対し、A・コヴァンはリユーベックとの比較史的考察や近世都市史の文脈において、都市貴族層へのリクルートの問題として新家系の誕生を意義づけようとする。その際「社会エリート」の概念を導入して都市貴族層を柔軟に定義しようとするものの、ヴェネツィアに関しては「エリート層＝貴族」として、その視点が活かされているとはいえない。<sup>⑭</sup>その結果、新規成員を柔軟に受け入れるリユーベック都市貴族層の開放的な性格に対して、ヴェネツィア貴族階級は「閉鎖的な都市貴族層[closed patriciate]の典型として規定されるのである。<sup>⑮</sup>そのため、新家系の加入は一時的な現象にすぎず、しかも旧家系に急速に統合されたとして、その意義を過小に評価することとなった。<sup>⑯</sup>

このように、ヴェネツィア貴族階級が抱える問題のひとつとして新家系の成立をとりあげる先行研究においては、その論点や前提となる問題関心が限定されるために、いずれもこの現象が持つ意義について十分に議論されていない。とはいえ、新家系の成立を正面から論じた研究は極めて少ない。すでに一九世紀末にはF・ミアリーが新家系の出自や経歴などについて家系ごとに紹介しているものの、本格的な論考はほぼ一世紀を経たR・サツバデーニの業績を待たなければならぬのである。サツバデーニは閉鎖的な貴族階級における新規成員の統合過程を論じるべく、その婚姻関係や高位官職への就任状況などについて、一八世紀末の共和国の滅亡まで段階を追って考察している。ただし、新家系の成立過程や出自についても分析しているとはいえず、主たる関心はあくまで旧来の貴族家系への統合過程にあり、新家系の成立を近世ヴェネツィアにおける社会的上昇の類型として捉えようという視点はみられないのである。

よって本稿では、これら先行研究の成果を参考にしつつも、ヴェネツィア貴族階級における新家系の成立について「社会的上昇」の観点から検討していくことを課題としたい。近世ヴェネツィア社会において、誰がいかにして上昇を果たしたのか。またその過程は、それ以前の上昇の類型とどのように関連づけられるのか。こうした問題について論じることで、ともすれば静態的に捉えられる近世ヴェネツィア社会の別の側面に光を当てることが可能となろう。そこで、まず次章で新家系成立の経緯についてみたくうえで、新家系の出自や統合過程へと論を進めていきたい。

- ① A・コヴァンによる引用。Cowan, A., 'New Families in the Venetian Patriciate, 1646-1718', *Aetno Veneto* 23, 1985, p. 56.
- ② トリンネウツェル・ミアリ, F., *Il nuovo patriziato veneto dopo la serrata del Maggior Consiglio e la Guerra di Candia e Morea*, Venezia, 1891, ristampa in Bologna, 1986, pp. 58-9.
- ③ 近世ヴェネツィア史研究のトリンネウツェル・ミアリによる註解。Grubb, J. S., 'When Myths Lose Power: Four Decades of Venetian Historiography', *Journal of Modern History* 58-1, 1986.
- ④ 後述のように、「新家系成立に賛成の演説を行った貴族のマルチェロは、新家系の加入が貴族階級の人材不足を解決するを訴えている。Nani, B., *Historia della Repubblica veneta*, in *Dagli Istituti delle cose veneziane i quali hanno scritto per pubblico decreto*, tomo IX, Venezia, 1720, p. 90. ㊦ Davis, J. C., *The Decline of the Venetian Nobility as a Ruling Class*, Baltimore, 1962, p. 76; Sabhadini, R., *L'acquisto della tradizione: tradizione aristocratica e nuova nobiltà a Venezia*, Udine, 1995, pp. 16-9. ㊦ 参照。なお人材の拡底については Davis, *op. cit.*,

- chap. IV.
- ⑤ 一七世紀中葉から成立した新貴族の家系統数については、同名家系の扱いなどをめぐって史料や研究者により若干の異同がある。
- ⑥ Sanuto, M., *I Diarii* vol. 45, Venezia, 1887, ristampa in Bologna, 1970, col. 569-72. ただし「*ノ*」にはオリオ家やマーニョ家など欠落している家名もある。
- ⑦ 一六世紀半ばには二五〇〇人程度であったヴェネツィア貴族の成人男子人口は、新家系の成立直前には一六二〇人にまで減少していた。その後新家系の加入によっても顕著な増加はみられず、一七一九年には一七〇〇人程度、世紀末には一〇〇〇人程度にまで落ち込んでしまふ。Davis, *op. cit.*, pp. 54-60. また一七、八世紀の貴族人口については Hunecke, V., 'Matrimonio e demographia del patriziato veneziano (secc. XVII-XVIII)', *Studi veneziani* n. s. 21, 1991. を参照。
- ⑧ 清水廣一郎「イタリア中世都市」「中世史講座 3 中世の都市」学生社、一九八二年（同「イタリア中世の都市社会」岩波書店、一九九〇年所収）、同「イタリア中世都市論再考」「史潮」新二四、一九八八年（同「中世イタリアの都市と商人」洋泉社、一九八九年所収）。
- ⑨ 一六三〇年からのベストの流行により二〇万二〇〇〇人ほどに落ち込んだヴェネツィアの人口は、世紀末までに一三万八千人にまで回復した。永井三明「ヴェネツィアの貴族」『イタリア学会誌』二九、一九八〇年、一三四—一五頁（同「ヴェネツィア貴族の世界 社会と意識」刀水書房、一九九四年所収）。
- ⑩ ヴェネツィア貴族階級における寡頭政的傾向の進展については、むしろあたり以下の文献を参照。Lane, F. C., *Venice: A Maritime Republic*, Baltimore and London, 1973, pp. 256-7, 403; Finlay, R., *Politics in Renaissance Venice*, London, 1980, p. 59ff. 永井三明「ヴェネツィア歴史記述の展開と貴族階級の危機」『文化学年報』三三、一九八四年、二一九頁以下（同、前掲書所収）、同「ヴェネツィアの貴族」二〇—頁以下。また拙稿「ヴェネツィア貴族階級における寡頭政と一五八二—一三年の十人委員会改革」『ルネサンス研究』五、一九九八年を参照。
- ⑪ Davis, *op. cit.*, chap. V. なお永井三明氏も、新貴族家系成立に関する評価については基本的にデーヴィスの見解を踏襲している。永井「ヴェネツィアの貴族」二四四—五頁。
- ⑫ Burke, P., *Venice and Amsterdam: A Study of Seventeenth-Century Elites*, 2nd ed., Cambridge, 1994; Cowan, *op. cit.*; id., *The Urban Patriate: Lübeck and Venice 1580-1700*, Cologne and Vienna, 1986; id., *Urban Europe 1500-1700*, London, New York, Sydney and Auckland, 1998.
- ⑬ バークが定義するヴェネツィアのエリート層はドージェとサン・マルコ財務官就任者のみである。その多くは高位官職を歴任した貴族であったとはいえ、両職とも名譽職的な色彩が強く、それが寡頭支配層全体を示すとは言いがたふ。Burke, *op. cit.*, pp. 14-5.
- ⑭ *ibid.*, p. 126.
- ⑮ Cowan, *Urban Europe*, chap. 3.
- ⑯ *id.*, *Urban Patriate*, pp. 51-7.
- ⑰ *ibid.*, chap. 4.
- ⑱ Cowan, 'New Families,' pp. 69-72.
- ⑲ Miani, *op. cit.*
- ⑳ Sabbadini, *op. cit.*

## 一 カンデリア戦争と新貴族家系の成立

地中海貿易により繁栄を享受したヴェネツィアにとって、オスマン・トルコの地中海進出は常に脅威であった。たとえば一六世紀には、一五〇三年のモドーネ、コローネの喪失を嚆矢として、一五三七年にはペロポネソス半島のネグロポントを放棄し、ヨーロッパ世界がレバントでの戦勝に沸き、トルコへの戦意が高揚していた一五七三年には、密かにトルコと和平を結んでキプロスを譲渡している。貿易と戦争の間で絶えずゆれるヴェネツィアは、結局はトルコへの譲歩を続けたのであった。

こうした状況は十七世紀においても変わらない。今回トルコの標的となったのはクレタ島である。

一六四五年六月、オスマン・トルコの軍隊はクレタ島カンデリアに上陸する一方、ダルマツィア沿岸のヴェネツィア領を陸上から攻撃し始めた。ヴェネツィア政府は、外交手段を通じてヨーロッパ諸国に援助を要請するとともに、トルコとの関係修復を模索するが、いづれも奏功せず、結局単独でのクレタ島防衛に臨むこととなる。<sup>①</sup>そこで臨時税の徴収やコムーネ資産の売却などの財政強化策を打ち出し、戦争による財政危機に対処しようとするが、こうした文脈において浮上してきたのが、国家に対して経済援助を申し出た非貴族家系に貴族身分を付与するという案であった。その経緯について確認してみよう。

一六世紀後半に出版されたF・サンソヴィーノのヴェネツィア案内書に加筆して増補版を刊行したG・マルティニオーニによれば、このカンデリア戦争に対処するために、

……一六四五年、このドージェ(F・ダ・モリン・筆者註、以下同)のときに下記のヴェネツィア貴族が二万ドゥカート以上を支払うことでサン・マルコ財務官に任命されることが提案され、この威信を与えられた。

ヴェネツィア司教ジョヴァンニ・フランチェスコの兄弟で、ドメニコ、ジョヴァンニ、アゴスティノの父ルイジ・モロシーニ。

故ドージェ、カルロ・コンタリーニの息子、騎士アンドレア・コンタリーニ。

（中略）

同様に市民身分や商人のさまざまな家系が、それぞれ一〇万ドゥカートずつ支払うことによつて都市の貴族の家柄に加えられた。それらは以下の通りである。

一六四六年七月二九日 ジョヴァンニ・フランチェスコ・ラビアとその息子たち、および子孫。

同年八月一九日 ジャン・バオロ・ヴィドマンとその兄弟、彼らの息子たち、および子孫。

同年八月二四日 ピエロ・ザグーリとその兄弟。右記に同じ。

同日 書記官長マルコ・オットボンとその息子たち、および子孫。

同日 アレッサンドロ・タスカとその息子たち、および子孫。

（中略）

一六五一年六月二日 伯ロドヴィコ・マニンとその息子たち、および子孫。

同（一六五二）年一月一七日 元老院秘書官ピエラントニオ・ゾンとその兄弟、彼らの息子たち、および子孫。

（以下略）<sup>④</sup>

こうした措置はダ・モリン以降の歴代のドージェによつても戦争終結まで継続されており、それぞれのドージェに関する章でまったく同じ形式の叙述が繰り返されている。<sup>⑤</sup>

マルティニオーニは事実経過を簡潔に記すだけである。それでもここから、新家系への貴族身分の付与が一〇万ドゥカートの拠出と引き換えに行われたこと、しかもそれはサン・マルコ財務官位の売却と並ぶ財政上の措置であったことがわかる。<sup>⑥</sup> すなわち、新貴族家系の成立はトルコとの戦争を契機とする財政強化策の一環に位置づけられ、その点でサン・マルコ財務官位の売却と同様の性格を持つのである。よつて、新家系の成立を戦時における自発的貢献と官職売却の伝統



の上に位置づけるコヴァンの解釈は妥当であろう。<sup>⑦</sup>

ところで、約三世紀ぶりとなった新家系への貴族身分の承認はさしたる抵抗もなく決定されたのだろうか。貴族バティスタ・ナーニが著した『ヴェネツィア共和国史』（以下『共和国史』<sup>⑧</sup>）と匿名の著者による手稿史料『ヴェネツィア貴族の間にある隠された相違』（同『隠された相違』<sup>⑨</sup>）をもとに、新家系承認に至る経過についてもう少し詳しくみてみよう。

ナーニの『共和国史』では、マルティニオーニ同様トルコとの戦争により逼迫する財政に対処するため、サン・マルコ財務官位が売却されたことが記された直後に、「ふさわしい生まれで富裕な財産を有する」いくつかの家系を貴族に加えるという法案について述べられている。<sup>⑩</sup> 新たな家系への貴族身分付与は、やはり戦争による財政危機への対応策として認識されているのである。しかしここで興味深いのは、そうした提案が「激しい反対にあった」と述べられている点である。<sup>⑪</sup>

そもそも国家に貢献した家系に貴族の身分と特権を与える方法は、最初から決められていたわけではない。まず六万ドゥカート<sup>⑫</sup>の提供を申し出た家系に対する貴族身分承認の法案が元老院に提出されるが、そこではP・カオトルタが反対する。そこで法案を修正し、拠出額を一〇万ドゥカートに引き上げたうえで大評議会に提案されるが、今度はA・ミキエリの反対にあう。<sup>⑬</sup> しかし、有力貴族の一人G・マルチェッロの賛成演説によって、ようやくラビア家を「永久に我々貴族に迎え」、「すべての貴族が享受するあらゆる特典や名譽、威信、特権」が与えられることが決議されたのである。<sup>⑭</sup> このラビア家の例を範として、これ以後続々と新家系が誕生していく。

このように、ラビア家を端緒とする新たな家系への貴族身分の承認は決して順調に進められたのではなく、むしろ強固な反対の末に実現したのであった。では、この問題を巡る対立の構図はどのようになっていたのだろうか。再び史料に戻って考えてみよう。

まずナーニの『共和国史』では、A・ミキエリの反対演説については簡潔に記す一方で、「冷静な判断に基づく *consensus concetti*」G・マルチェッロの「極めて説得力のある演説 *discorso persuasivo molto*」は原文が引用され、それによ

って大勢が決したとする。<sup>⑮</sup> それに対し『隠された相違』では、法案に反対して大きな影響力を持ったミキエリにはドージェのダ・モリンから圧力がかけられる一方、「沈痛な面持ちで con faccia lugubre」演説するマルチェッロには支持が集まらなかったという。<sup>⑯</sup> ドージェをはじめとする推進派の説得によって最終的には法案は可決されるが、それでも戦争の勝利を約する指導層への疑念は最後まで消えなかったようである。

戦争開始の時点でトルコへの降伏か、あるいは（カンディア戦争中の）七八家の新家系の創設かという二者択一が大評議会で提示されていたれば、むしろ共和国は……敗北（の方を選択）していた。降伏することで失うのは榮譽だが、後者では榮譽とパンと、そしてその結果生活をも失うからである。しかして（新たな）家系は創出され、共和国は敗北した。<sup>⑰</sup>

この二つの史料の論調の違いは、次のように説明されよう。すなわち、新家系成立を進めたのはドージェのダ・モリンをはじめとする有力貴族層であり、それは多くの貧困貴族の利害を無視するものであったということである。『共和国史』の筆者B・ナーニはサン・マルコ財務官にも就任している有力貴族の一人であり、いわば政府の見解を代表する人物といつてよからう。<sup>⑱</sup> だからこそ『共和国史』におけるマルチェッロの「説得力のある」賛成演説が強調され、反対勢力に対するドージェからの圧力などには触れられなかったと考えられる。一方『隠された相違』の叙述は、むしろ貧困貴族をはじめとする貴族一般の率直な意見を代弁しているように思われる。<sup>⑲</sup> 新家系の承認は「これらの（家系の）加入を切望する」有力貴族層によって進められたのであり、その意味で寡頭政的な権力構造を顕著に反映した政策であった。

換言すれば、それは有力貴族層の「危機感」を如実に示しているともいえる。「戦争による窮乏状況を支えるために、共和国は（貴族身分を求める家系の）身分ではなく金銭を当てにして」いたのである。<sup>⑳</sup> 結局カンディア戦争の終結までには八〇〇万ドゥカートが国庫に収められ戦争の継続に貢献した。<sup>㉑</sup> ただし、貧困貴族層の反対にあつて一〇万ドゥカートとなつた貴族身分の「代金」は、すべてが無償の提供というわけではなかった。たとえば少し時代は下るが、一七〇四年に貴族身分を獲得したフラカッセッティ家の請願書には、六万ドゥカートが現金による寄付であり、残る四万ドゥカートは造

幣局に預託されたことが明記されている。またナーニの『共和国史』でも、新家系創設の当初からそうした内訳であったとして記述されている。<sup>④</sup> 一方『隠された相違』の匿名の著者は、実際に一〇万ドゥカートが拠出されたか疑問を持つており、それより少なかった可能性を示唆している。<sup>⑤</sup> 一〇万ドゥカートという金額は、新家系への貴族身分承認に反発する貧困貴族層への説得の材料として持ち出されたにすぎず、「有力貴族たち *grandi* が大評議会（に属する貴族たち）を欺いて」新家系の創設を進めたのであった。

このように、約三世紀を経て実現した新貴族家系の成立は、カンディア戦争という危機的な状況において財政強化を余儀なくされた有力貴族層によって推進された政策であった。こうした性格は二度にわたるモレア戦争においても変わらず、結局一七七八年までに一二七家におよぶ新家系が創設された。それでは、この機会を利用して貴族への上昇を果たしたのどのような人々であったのだろうか。次章では新家系の出自について検討しよう。

- ① カンディア戦争と新貴族家系の成立を巡る経緯については、Nani, *op. cit.*, p. 83ff.; Romanin, S., *Storia documentata di Venezia*, Tomo VII, Venezia, ristampa, 1974, pp. 260-3; Sabbadini, *op. cit.*, pp. 14-9.
- ② *ibid.*, pp. 14-5.
- ③ F・サンソヴィーノの著作の第三版を刊行するにあたり、編者のマルティニオーニは内容全般にわたって加筆している。Sansovino, F., *Venezia Città Nobilissima et Singolare*, Venezia, 1663, ristampa, 1968.
- ④ *ibid.*, pp. 725-7. 引用文はサンソヴィーノの著作中の「ドーージェ列伝 *Delle vite de Principi*」の章に含まれるが、この章に関しては一五七八年にドーージェとなった N・ダ・ボンテについてまでが原文のままであり、それ以降はマルティニオーニの加筆分である。
- ⑤ *ibid.*, pp. 728-9, 743, 746, 753.
- ⑥ サン・マルコ財務官は元首であるドーージェに次ぐ名譽と威信を認められ、通常は高位官職を歴任した年長の貴族が就任した。またドーージェと同様終身職であり、ドーージェは財務官就任者の中から選ばれるのが通例であった。Lane, *op. cit.*, p. 267. 後述する史料『隠された相違』においても、財務官に就任していないドーージェの登位は「以前には百年に一度の珍事だったが、近年は五回も起こっている」として、財務官位売却による威信の低下が嘆かれている。*Distinzioni segrete che coronano fra le casate nobili di Venezia*, Biblioteca Nazionale Marciana, MSS, Italiani, CL. 7, No. 2226 (9205), c. 37r.
- ⑦ Cowan, 'New Families,' p. 57.
- ⑧ Nani, *op. cit.*
- ⑨ *Distinzioni segrete*
- ⑩ Nani, *op. cit.*, pp. 88-9.
- ⑪ *ibid.*, p. 89.

- ⑲ *Distinzioni segrete*, c. 45v-45r; Sabbadini, *op. cit.*, p. 16.  
 ⑳ Nani, *op. cit.*, p. 89; *Distinzioni segrete*, c. 45r; Sabbadini, *op. cit.*, p. 16.  
 ㉑ Nani, *op. cit.*, pp. 89-91.  
 ㉒ *ibid.*  
 ㉓ *Distinzioni segrete*, c. 45r.  
 ㉔ *ibid.*, c. 46r-47v.  
 ㉕ B・ナニーは外交使節に七度選出され、サン・マルコ財務官にも就任した有力貴族の一人であり、一六二三年から四四年までの『ヴェネツィア共和国史 *Historia della Repubblica Veneta*』も執筆した。Sansonino, *op. cit.*, Primo catalogo de glihuomini letterati veneti, p. 2; Burke, *op. cit.*, pp. 94-5.  
 ㉖ 『隠された相違』は、本文の記述からM・ジュステイニアニーのドージェ在位中（一六八四年—一八八年）に書かれたと思われる。Distinzioni segrete, c. 37r. 三章で述べるように、この史料の執筆の動機は、

## 二 新貴族家系の出自

カンデリア戦争による財政危機に乗じて貴族身分に加えられた新家系の社会的出自について、新家系成立を主導した有力貴族層の見解を代弁するB・ナニーの『共和国史』では次のように述べられている。

貴族に加えられた家系は七〇家にもおよぶ、それらはすべてヴェネツィアの秘書官や市民 Cittadini の身分に属するもの、従属都市の貴族、そして若干の外国人から選ばれた。<sup>①</sup>

ここでいう秘書官とは、十五世紀半ば以降政治的実力を蓄積してきた上層官僚層を指す。また市民とは貴族に次ぐ法的地位を与えられている特権身分のことであり、官僚もこの市民身分に属していた。<sup>②</sup> よって、ここで言及されている新家系の

原則的には平等な貴族階級の間には厳然と存在する威信や名譽の「隠された相違」を明らかにすることであり、新家系の成立についても「公になつていない特殊な事柄」について述べるといふ。<sup>③</sup> *ibid.*, c. 43v. こうした点から、筆者は有力貴族に反対の立場にある貴族であると考えられるが、その内容は基本的に事実と即した信頼に足るものであり、同時代の史料として有益な情報を与えてくれる。なお、サツパディーニも基本的な史料のひとつとして活用している。

- ⑲ *ibid.*, c. 46v.  
 ⑳ ヘルムトダ＝セメントイ家の出自に関する記述から。 *Ibid.*, c. 55v.  
 ㉑ *Ibid.*, c. 45r.  
 ㉒ フラカッパティ家の申請書は Miari, *op. cit.*, pp. 43-4.  
 ㉓ Nani, *op. cit.*, p. 88.  
 ㉔ *Distinzioni segrete*, c. 45r.  
 ㉕ *Ibid.*, c. 46v.

出自は、本土領の支配層である貴族を含め、そのほとんどがヴェネツィア貴族に次ぐエリート層に位置づけられることになる。とはいえ、ナーニは本文中で新家系名を列挙するだけで、個々の家系の出自については何も明らかにしていない。

このナーニの記述には、他の史料と大きく異なる点がある。たとえば前章で引用したように、G・マルティニオーニは「市民身分や商人のさまざまな家系が……都市の貴族の家柄に加えられた」と記しており、ナーニが全く触れていない商人出自家系の存在に言及している。実際には貴族の称号と官僚職の保有について識別できるだけで、多くの家系については何も書かれていない<sup>④</sup>。しかし、それは逆に従属都市の貴族や官僚ではない「商人」家系の多さを示唆するように思われるのである。

商人出自家系については、新家系の成立を批判的に語る『隠された相違』でも取りあげられる。そこでは新家系の出自についてこう述べられている。

これらの新貴族の中には、きわめて高貴で、ヴェネツィアよりも古い（歴史を誇る）本土領の都市のように、おそらくヴェネツィア貴族よりも古い貴族が半ダースほど含まれる。（中略）その気高い高貴さによって著名な家系に加えて、彼らの祖国での出自においてであれ、ヴェネツィアの書記局での職務においてであれ、極めて品位のある *ovine* 家系が二〇家ほどある。しかし、残りすべて極めて卑しいものたちであり、その大部分は商人である。しかもこれらの中には、卑しく軽蔑すべき *vine abilia* 商売を営んでいるものもあるのだ。<sup>⑤</sup>

新貴族家系の出自として、ここではまず他都市の貴族や書記局の官僚などの「高貴な」あるいは「品位のある」家系が挙げられている。この点はナーニと同じである。しかし、重要なことは新家系の多くが商人層を主体とする「卑しい」家系であったことが明言されている点である。ここにナーニの『共和国史』と『隠された相違』の最大の違いがある。すなわち、商人家系の存在に触れず、新家系がヴェネツィア貴族に次ぐエリート層から迎えられたかのように装うナーニに対して、『隠された相違』はそれがフィクションであり、実際は多くの「卑しい」商人たちが貴族身分を獲得していること

表1 新貴族家系の社会的出自

社会的出自	家系数(%)
貴族	26家 (20.6%)
書記局官僚	15家 (11.9%)
商人	76家 (60.3%)
その他(法律家など)	6家 (4.8%)
不明	3家 (2.4%)
合計	126家 (100%)

※「卑しい」身分の女性と結婚して貴族身分を失った同一家名の分家が再び貴族身分を獲得したボンリーニ家は1家として扱う。

※新家系の社会的出自に関しては、史料や研究者の間で若干の相違がみられる。本稿では同時代人が各家系についてどのような認識を持っていたかを重視するため、マルティニオーニの記述や『隠された相違』に記載されている出自をもとに分類した。なお『隠された相違』のリストは51家分の情報が欠落しているが、その部分はほぼマルティニオーニの情報で補うことができる。

*Distinzioni segrete che corrono fra le casate nobili di Venezia*, Biblioteca Nazionale Marciana, MSS., Italiani, CL. 7, No. 2226 (9205), c. 52r-61v; Sansovino, F., *Venetia Città Nobilissima et Singolare*, Venezia, 1663, ristampa, 1968, pp.725-9, 743, 746, 753より作成。また Miari, F., *Il nuovo patriziato veneto dopo la serrata del Maggior Consiglio e la Guerra di Candia e Morea*, Venezia, 1891, ristampa in Bologna, 1986; Sabbadini, R., *L'acquisto della tradizione: tradizione aristocrazia e nuova nobiltà a Venezia*, Udine, 1995, pp.171-3も参照。

を暴くのである。もちろんそこには、新家系の成立に批判的な史料ゆえの誇張もある。しかしながら、両者のこの顕著な相違は、前章で確認した新家系創出をめぐる対立の焦点のひとつに、こうした「卑しい」家系への貴族身分付与に対する反発があったことを容易に推測させる。「(新家系の)身分ではなく金銭を」重視する政府の方針や、その結果としての「卑しい」商人出自貴族の登場は、新家系成立に対する多くの貴族の不満を増幅させたことだろう。だからこそナーニは、商人出自家系の存在について沈黙しているのではないだろうか。

成はどのようなようになっていたのであるか。この問題に正確に答えることは難しいが、これまでみた史料から、本土領の貴族、ヴェネツィアの官僚層、そして多数を占めると思われる商人に大別できそうである。さらにマルティニオーニの記述や『隠された相違』に付された新家系のリストから、ある程度個々の家系の出自を明らかにして、それを分類することができる。これに先行研究の成果を加えて作成したのが表1である。史料や研究者の間には若干の異同も見られるが、それでも表1から新家系の出自について大まかな傾向を見ることはできるだろう。

まず、貴族出自に分類される家系は、例外はあるもののほとんどがヴェネツィアの本土領の貴族である。これらの家系は、ナーニの『共和国史』や『隠された相違』の記述にもあるように、最も好感をもって迎えられたグループだといえよう。「これらの中でもすべてを凌ぐ」ブレッツィアのガンバラ家や「財産と多くの尊敬を享受する高貴なヴィチエンツァ貴族」フェラモスカ家など、<sup>⑦</sup>いずれもヴェネツィア貴族の身分を与えられるにふさわしい「高貴さ」を有する家系とみなされる。実際『隠された相違』のリストでも、その貴族性には疑う余地がないともいうように、貴族出自の家系については「高貴さ」や「富裕さ」を確認するだけの簡単な記述で済まされることが多い。

貴族に次いで歓迎されたのは、書記局官僚として国政に関与していた家系である。この出自集団は、すでに貴族となる以前から何らかの功績が知られている唯一のグループであるといつてよい。たとえば前章で引用したマルティニオーニの記述から、書記官長の職にあったオットボン家や元老院秘書官であったゾン家が貴族身分を獲得したことが知られるし、一六五三年に貴族となったN・コンデユルメールの父親は、カンディア戦争前夜の二六四五年にトルコへの対応を協議するための外交使節としてオランダへ派遣されたことが『共和国史』<sup>⑧</sup>にみえる。また一七一六年に貴族身分を得たフランチエスキ家は、すでに一六世紀前半には著名な官僚家系のひとつに数えられるが、一五二九年に書記官長となった同家のアンドレアの記憶は一八世紀初頭においても生き続けた。<sup>⑨</sup>よって、政治の実務に習熟していたこれらの官僚家系は「世間の賞賛をもって」<sup>⑩</sup>貴族に加えられたのである。また官僚家系の側でも、それまで築いてきた威信や政治的実力をさらに高めるべく、この機会を逃さずに貴族への上昇を実現しようとした。ただし、そこには問題もあった。「ヴェネツィアの書記局での職務において……極めて品位のある」家系に対しても、一〇万ドゥカート<sup>⑪</sup>の抛出という条件は緩和されなかつたのである。そのため高額の抛出金を確保するのに手間取ったドルチェ家は、一六四八年に一度申請を却下されてしまい、金銭をかき集めて悲願を達成したのは九年後の一六五七年であった。<sup>⑫</sup>

このように、新貴族家系のなかでも本土領の貴族や官僚出自の家系が一律に歓迎されたことは史料や研究者の間でも一

致している。しかしながら、両出自集団が新家系全体に占める割合は合計でも約三分の一にすぎず、『隠された相違』の著者が嘆くほどではないにせよ決して多くはない。やはり新家系の多数を占めるのは「卑しい」商人出自家系なのである。そして『隠された相違』にみられるような商人家系に対する激しい反発は、すでにサツバディーニやコヴァンによっても紹介されている。たとえばゾリオ家やミネッリ家は「彼ら自身がエプロンをつけ油やサラミを売って商品の間を行き来し」、タスカ家は「とても粗末な服装」をしていると蔑まれる。またコツレツジョ家は「彼らの物腰や服装では貴族たち gentiluomini の中に入ることはできない」といわれ、「自分の商売以外のことには疎い」マルティネッリ家や「富を」維持しているだけでなく、けちけちとした取るに足らぬ儉約によってさらに増やしている「ロンブリア家も、その生活態度を揶揄されるのである」<sup>⑫</sup>。

こうした「商人ゆえの差別」とでも言うべき言辞は、『隠された相違』のリストにも随所に見出すことができる。「極めて家柄の低い」ヴェツツイ家は、コツレツジョ家のように「物腰が粗野」であったし、「ベルガモ出身の粗野な」ペリッチョーリ家は「けちくさい儉約によつて」財産を貯め込んでいた。<sup>⑬</sup> その結果マンフロッテイ家やヴェロネージ家の場合のように、こうした「卑しい」商人家系に対する貴族身分の承認は「世間の強い驚きと不評」や「大きな不信と嘲笑」を招くことさえあったのである。<sup>⑭</sup>

ところで、商人家系の中には金銭によつて他国の貴族身分を得たり、貴族の血統を主張したりするものもあった。たとえば先述の「ベルガモ出身の粗野な」ペリッチョーリ家は神聖ローマ皇帝より伯位を、マンゾーニ家はポーランドの貴族身分を購入している。<sup>⑮</sup> 一方レッツォニコ家は古い血統とミラノ領における貴族身分を、バルジーザ家は申請書においてやはり貴族の血統を主張している。しかし、こうした家系に対しても『隠された相違』の筆致は冷淡であり、貴族出自について懐疑的ですからある。結局金銭こそが「どんな高貴な血統の歴史をこじつけるよりも力を持つ」のであり、最終的には出自よりも「国家の窮状が勝」るがゆえに「卑しい」商人家系にも貴族身分が与えられたのである。<sup>⑯</sup>



このように、商人出自家系に与えられた『隠された相違』の評価は極めて低い。あたかも新家系の成立に対する反発がすべてこうした家系に向けられているかのようである。そして、これが多くの貴族の率直な感情を代弁するものだとすれば、これまで指摘されてきたような「商人ゆえの差別」はやはり厳然と存在していたように思える。しかしながら一方で、同じ『隠された相違』のなかに商人家系に対する好意的で肯定的な評価が見出されることも事実である。たとえばそれは、「豊かな才能に恵まれた名譽ある」ヴェネツィア商人のポルヴァロ家であり、「品位ある形で」商売に携わるコンテンテイ家であり、その「品位ある態度に全員が満足して」貴族に加えられたフラカッセッティ家である。すなわち、商人出自家系は一樣に差別され蔑視されたのではなく、そこには何らかの区別がなされていたのであった。このことをどう考えたらよいのだろうか。

換言すれば、それは商人家系のような側面に対して激しい反発が引き起こされたのかという問いである。そこでこの問題について考えるために、ここで新家系の地理的な出自に視点を移してみたい。

表2は、社会的出自の場合と同じく『隠された相違』に付されたリストをもとに先行研究の成果を加味して作成した。これを見ると、ヴェネツィア出身者は全体の四分の一程度を占めるにすぎず、大半はヴェネツィア以外から新たに移ってきた家系であることがわかる。しかもその多くは本土領出身であり、その割合は全体の約六割におよんでいる。

これに、表1に示した社会的出自の分類結果を重ね合わせながら検討しよう。まず本土領の貴族であった家系は、当然その地理的出自も本土領に求められる。一方書記局官僚家系は、官僚の身分資格がヴェネツィアの上層市民層に限定されていたことから、ヴェネツィア出身であると推測される。実際、表1で官僚出自家系に分類された一五家系すべてについてヴェネツィア出自であることを確認できるのである。したがって、表2でヴェネツィア出自とされている三二家のうち、約半数は官僚家系が占めることになる。すると残る半分はおもに商人家系であったことになるが、その数は商人出自家系全体から見れば決して多くはない。新貴族の主体となる商人家系の多くは、全体の傾向を反映するように本土領を中心と

表2 新貴族家系の地理的出自

地理的出自	家系数 (%)
ヴェネツィア (含ラゲーナ地域)	32家 (25.20%)
東地中海領	3家 (2.36%)
本土領	73家 (57.48%)
ベルガモ	26家
パドヴァ	11家
ヴェネチア	11家
ブレッシア	5家
トレヴィ	4家
ヴェローナ	2家
その他	14家
ヴェネツィア領以外のイタリア	9家 (7.09%)
イタリア外	8家 (6.30%)
不明	2家 (1.57%)
合計	127家 (100%)

※表1同様、ボンリーニ家は1家として扱う。

※異なる地域に居住していた分家が合同して貴族身分を獲得したカヴァッツァ＝レオン家は2家として個別に分類する。

※表1同様、史料や研究者の間に異同があるが、『隠された相違』に記載されている情報をもとに分類し、欠落分についてはミアーリやサツパディーニを参照した。

*Distinzioni segrete*, c. 52r-61v; Miari, *Il nuovo patriziato veneto*; Sabbadini, *L'acquisito della tradizione*, pp. 171-3 より作成。

するヴェネツィア外の出身であった。

こうした地理的出自の分布が持つ意義についてはあらためて検討するとして、ここでは先に提示した問題、すなわち商人出自家系への相反する評価の問題に戻ろう。それを解く鍵は、商人家系の多くが本土領を中心とする都市外の出身であり、ヴェネツィアに定着してから十分な時間が経過していなかった点にある。

『隠された相違』において商人出自家系に対する蔑視がみられること、そして金銭による貴族の称号の獲得や遠い過去の貴族の血統の主張には非常に冷淡であったことはすでに確認した。そこには商人という職業や貴族身分取得の手段もさることながら、急速に蓄財し上昇を果たそうとする家系への反感が透けて見える。たとえば、先にみたレッツォニコ家は貴族出自を主張するが、直接

には祖先は「貧しいベルガモ人」であり「短期間で莫大な富を築いた」とされる<sup>②</sup>。同じくベルガモ出身のベルシコ家やリーニ家の場合も、ヴェネツィアに出て店員として働いた後に自分の店を持つまでに成功し、ついには貴族身分を獲得するに至る<sup>②</sup>。こうしてヴェネツィア外から流入して経済的な成功を収め、急速に上昇しようとする家系に対する『隠された相違』の評価は極めて厳しい。逆に、先述のポルヴァロ家やフラカッセッティ家のように、同じ商人であってもすでにヴェネツィアに定着して一定の評価を得ていた家系は、「富裕」で「名誉ある」商人として好意的に描かれるのである。ま

た、ヴェネツィア出身とされる商人家系のなかには、『隠された相違』ではほとんど言及されないものの、官僚家系と同様上層市民たる「生まれによる市民」身分を取得していた家系も少なくない<sup>②</sup>。これは、こうした家系がすでに長期にわたって富と名誉を蓄積していたことを示すと考えられよう。すなわち、先に述べたような「商人ゆえの差別」ともいうべき事例は、単に商人という出自の問題ではなく、むしろ短期間に蓄財し上昇を果たした家系に対する辛辣で露骨な反感の表れなのである。だからこそ、こうした急速な上昇を象徴するような他国の貴族身分の購入に対しては、極めて冷淡な反応にとどまっていた。

もちろん、貴族身分の「開放」自体が反発を招いたことは前章でみた通りである。しかしそれが避けられないならば、新たに受け入れるべき家系の条件として、貴族や官僚といった社会的出自とともに、ヴェネツィアへの長期間の定着とその間の名誉や威信の蓄積が重要であった。こうした要件は、ヴェネツィアへの一定期間の定住と「名誉ある職業」への従事を柱とする一五世紀中葉以降の「生まれによる市民」身分の厳格化の過程においてすでに確認できる<sup>③</sup>。したがって、ここでみられた「商人ゆえの差別」とは、『鉄を金に変える卑しき鍛冶屋の』とく *così di vilissimi fabri, cangiato il ferro d'oro*<sup>④</sup> ヴェネツィアの貴族身分を獲得した「卑しい」商人家系の急速な蓄財と社会的威信とのアンバランスに対する激しい嫌悪感を示すものとして捉えられるべきであろう。

それでは、異なる出自を持ち異なる評価を受けつつも、ともに貴族身分を与えられたこれらの新家系は、その後どのような過程を経て旧来の貴族家系に統合されていったのであろうか。それが本章の課題となる。

① Nani, *op. cit.*, p. 38.

② 市民身分と書記局官僚層の「いづれは」 Casini, M., 'La cittadinanza originaria a Venezia tra i secoli XV e XVI: una linea interpretativa', AA. VV., *Stati veneti offerti a Gaetano Cozzi*, Venezia, 1992; Nefi, M., 'A Citizen in the Service of the Patrician state: The

Career of Zaccaria de' Freschi', *Studi veneziani* n.s. 5, 1981; id.,

*Chancery Secretaries in Venetian Politics and Society, 1480-1533* Ph. D. dissertation, Univ. of California, Los Angeles, 1985; Trebbi, G., 'La cancelleria veneta nei secoli XVI e XVII', *Annali della Fondazione Luigi Einaudi* 14, 1980; id., 'Il segretario veneziano', *Archivio*

- storico italiano 144-1, 1986; Zannini, A., 'Un ceto di funzioni amministrativi: i cittadini originari veneziani 1569-1730,' *Studi veneziani* n.s. 23, 1992; id., *Burocrazia e burocrati a Venezia in età moderna: i cittadini originari* (sec. XVI-XVIII), Venezia, 1993. ほか拙稿「近世初頭のヴェネツィアにおける書記局官僚層の形成とその意義」『史料』八〇—五、一九九七年も参照。
- ③ Nani, *op. cit.*, p. 91.
- ④ 前章での引用参照。ネッピは「書記局長ペルロ・キョッポム」(元巻院秘書官ビエラマンテ・キョッポム)とされた書記局官僚や「伯爵ドマッペロ・ド・ピニン」であった本土領の貴族の出自についてのみ確認できず。Sansovino, *op. cit.*, pp. 725-9, 743, 746, 753.
- ⑤ *Distinzioni segrete*, c. 43v-44v.
- ⑥ 『隠された相違』に付されたリストは、一七一八年に承認された最後の新家系ジロー家に関する記述まで含まれることから、一八世紀中頃に本文とは別の筆者が追加したものとと思われる。ただし残念なことに、いくつかの例外を除き一六六二年以前に貴族身分を得た五人家分の記述が欠落している。ibid., c. 52r-61v.
- ⑦ カンチチ家についてはibid., c. 43v、フオロキスカ家についてはibid., c. 53r.
- ⑧ Nani, *op. cit.*, p. 68.
- ⑨ *Distinzioni segrete*, c. 60v-60r.
- ⑩ 同族出身のヌヴェネリ家の例。ibid., c. 60r.
- ⑪ ibid., c. 44r; Miani, *op. cit.*, pp. 36-7; Sabbadini, *op. cit.*, pp. 114-5.
- ⑫ ibid., pp. 50-1; Cowan, 'New Families,' p. 68.
- ⑬ ヴェネツィア家、ペリッチェーリ家についてはそれぞれ *Distinzioni segrete*, c. 60r, c. 59r.
- ⑭ フンプロットタイ家、ヴェロネージ家についてはそれぞれ ibid., c. 59r, c. 60v. ほかバस्ता家の「世間の驚き」を可成り起した。ibid., c. 53r; Miani, *op. cit.*, p. 68.
- ⑮ ペリッチェーリ家については *Distinzioni segrete*, c. 59r; Miani, *op. cit.*, pp. 68-9。フンブーニ家については *Distinzioni segrete*, c. 57r; Miani, *op. cit.*, p. 60.
- ⑯ ソンツァニコ家、バルジーサ家についてはそれぞれ *Distinzioni segrete*, c. 56r-57v, c. 58v.
- ⑰ ibid., c. 57v.
- ⑱ ibid., c. 59r.
- ⑲ ホルヴァロ家、コンテンタイ家、フラカッセッティ家についてはそれぞれ ibid., c. 52r, c. 56r, c. 60v.
- ⑳ ibid., c. 52r-61v; Miani, *op. cit.*
- ㉑ *Distinzioni segrete*, c. 56r-57v.
- ㉒ ヴェルトロ家についてはibid., c. 54v、リーニ家についてはibid., c. 54v-54r.
- ㉓ たムゼセトット家、ゼレリ家、サターリ家など。Sabbadini, *op. cit.*, pp. 171-3. ほかトマンタ家の経済活動については Rapp, R. T., 'Real Estate and Rational Investment in Early Modern Venice,' *Journal of European Economic History* 8-2, 1979 を参照。
- ㉔ 「生かされた市民」自身の厳格化については拙稿「書記局官僚層の形成」一章参照。
- ㉕ *Distinzioni segrete*, c. 57v.

### 三 新貴族家系の統合

カンディア戦争を契機に成立をみたヴェネツィアの新貴族家系は、その身分においても特権においても旧来の貴族家系と何ら区別されることなく貴族階級に迎えられる。それでは、新家系はどのような過程を経て旧家系に受容され、統合されていったのであろうか。

この問題については、A・コヴァンとR・サツバディーニの間で解釈が分かれている。コヴァンは、新家系に対する容赦ない非難に反して、高額の嫁資をもたらしうる新家系は婚姻関係の形成においてはむしろ歓迎されていることを重視する。富裕貴族の態度が依然排他的であることから、これが貴族階級全体に妥当するかどうかについては判断を留保しているものの、結果的に新家系の統合は短時間で達成されたのであって、新家系への敵意はその適応過程の一部に過ぎないと結論づけるのである。<sup>①</sup>これに対しサツバディーニは、新家系の婚姻関係と官職への就任という二面からその統合過程について検討した。その結果、新家系は一七世紀中には高位官職から排除され、婚姻関係においても差別される傾向にあったが、一八世紀に入ると徐々に高位官職への進出を果たすようになり、世紀後半に至つてようやく完全な統合が実現されたとして、新家系の段階的な統合を主張している。<sup>②</sup>本章ではこうした議論や成果を踏まえながら、新家系の統合過程について考察していこう。

ところで、前章では新家系に対して出自の相違などに応じた相反する評価が与えられていたこと、またいわゆる「商人ゆえの差別」が、実際は「鉄を金に変える」ような「卑しい」商人家系の「錬金術」的な上昇への反発であったことを確認した。新家系を受容する側のこうした感情の違いは、その後の統合過程に影響したのであろうか。

実は、貴族や官僚出自家系への好意的な評価と「卑しい」商人への激しい嫌悪感との顕著な相違にもかかわらず、それが旧貴族たちの実際の行動をどこまで規定していたのかという点には疑問の余地がある。たとえば、元老院と大評議会で

行われた個々の家系への貴族身分の承認をめぐる投票結果は示唆的である。

新家系が貴族身分を獲得するには、有力貴族層の意向を反映する元老院と、すべての成年男子貴族が参加しうる大評議会で承認されなければならなかった。よって両機関での投票結果は、個々の家系に対する旧家系の評価や感情を示す指標のひとつとなる。そこで『隠された相違』に付されたりストヤF・ミアーリが挙げている投票結果を分析すると、意外にも貴族や官僚、あるいは「名誉ある」商人と「卑しい」商人といった出自集団の間には、元老院と大評議会での賛成票の割合にはほとんど違いがみられなかった。たとえば「粗末な服装」を揶揄されたタスカ家は、大評議会において九割を超える賛成票を獲得しているし、「ベルガモ出身の粗野な」ペリツチョーリ家の場合も同様である。<sup>④</sup>しかもこれらの家系が得た賛成票の割合は、本土領の貴族や官僚出自の家系と比べても高い水準にある。よって、出自集団の違いに基づく好悪の相違は相対化される必要がある。もちろん、新家系の中には賛成票の割合が極端に低い場合もある。しかしそうした家系は、たとえば嫡出性に疑問がもたれていたルツカ家や、ユダヤ人との風評が飛び交っていたフォンセカ家のように、むしろ個々の家系の特殊な事情によるものであった。<sup>⑥</sup>

さらにこの投票結果の分析から、開戦後の数年間はどの家系も相対的に高い賛成率で貴族身分を認められているのに対し、それ以降は時間の経過とともに全体的な賛成率が低下していく傾向を指摘することができる。<sup>⑦</sup>よって、逼迫する財政問題に対処するために、当初は新家系への貴族身分付与を承認する空気が強かったものの、多くの新貴族が承認されるにつれて、新家系の成立が恒常化することへの反発が強まっていったといえよう。また投票結果は、一般に元老院よりも大評議会において反対票の割合が高く、時に一〇～二〇ポイントもの差が開いている場合もあった。<sup>⑧</sup>これは一章でみたように、有力貴族層が新家系の受容に積極的であったのに対し、貧困貴族層の反発が強かったことを示すと思われる。先にみたような商人出自家系への強烈な反発は、こうした貧困貴族層の感情を代弁した政治的な言説として受け取られるべきであらう。

ところで、新家系への貴族身分認定をめぐって、その家系の出自による差別がみられないことは、次のような事実の理解を容易にする。すなわち、貴族階級内の権力構造において各家系の出自による差異が消失する一方で、新貴族家系はそれ全体をひとつのカテゴリとして貴族階級における階層構造の最下層に位置づけられ、高位官職から排除されていたということである。たとえば、サツバディーニが引用するある匿名の著者の記述によれば、「貧しい貴族や新貴族、ギリシア人（クレタからの亡命貴族）は、大評議会での投票に参加することのほかは特権を持たず、元老院、あるいは重要な都市や軍隊の官職からは排除されており、新家系は「古い貴族から完全に無視されている」のである。しかもこうした高位官職からの排除は、『隠された相違』において「秘書官であったこれらの貴族家系の多くは、きわめて尊敬を集め、大きな勢力を持っていたが、いまではあまり重んじられていない」と述べられているように、それまで政治的実力を蓄積し、国政にも関与することができた官僚出自家系においても同様であった。

このように、急速な上昇を実現した「卑しい」商人への反感は実際の投票行動には反映されず、むしろ貴族階級における権力構造の中では「新家系ゆえの差別」として現れてくる。新貴族家系は寡頭政的な権力構造の最下層に位置づけられ、高位官職へ進出することを阻まれていたのである。マルティニオーニの叙述やナーニの『共和国史』において、貴族身分獲得後の活躍が知られる新家系がほとんどみられないことは、こうした「新家系ゆえの差別」を裏付けるといえよう。もちろん新家系の中には、教皇アレクサンデル八世を出したオットボン家をはじめ、著名な家系も含まれていた。しかしながら、それは新家系のごく一部にすぎず、全体的にみればヴェネツィア貴族の階層構造の中で下位に位置づけられていたのである。また「新家系ゆえの差別」は、サン・マルコ財務官位の売却においても確認することができる。一章でも引用したように、マルティニオーニはこの役職が二万ドゥカートで売却されたと述べるが、新家系であるフィーニ家やマニン家がこの役職を購入する際の価格は五倍の一〇万ドゥカートであった。一方、高位官職から排除された新家系は下位の官職に就任し競争を激化させたが、それはこうした官職からの収入に依存する貧困貴族との利害の対立を招いたのである。

すでにみたように、貧困貴族層からの新家系成立に対する「反発は、それが彼らの「榮譽とパンと、そしてその結果生活をも失」わせるものであったからこそ激しさを増したのである。

こうして既存の権力構造における「新家系ゆえの差別」の実態が明らかとなった。それでは、コヴァンが新家系の急速な統合を主張する根拠となった婚姻関係についてはどうだろうか。

『隠された相違』には、新家系と婚姻関係を結ぼうとした旧家系に関する記述がある。たとえば、旧家系の中でもさらに「旧い家系」に属し、過去にドージェを出したこともあるサグレード家は、一六六二年に貴族身分を得たベルレンディス家と婚姻関係を結んだ。しかし、ベルレンディス家は「単に新家系に属すというだけでなく」、本土領の統治官在任中の不誠実な行為を非難されていたために特に状況が芳しくなかったという。さらに同家の女性との結婚は、サグレード家が関与したドージェ選挙にも不利に作用したとされるが、こうした記述は結婚市場においても「新家系ゆえに」不利な立場におかれていたことを示唆している。しかし、それでもサグレード家がベルレンディス家との婚姻関係を選択したのは、「ベルレンディス家の嫁資を無駄にしないため」<sup>⑭</sup>であった。

新家系が婚姻関係形成の対象として低くみられていたことは、やはり「旧い家系」に属するモロシーニ家と一六四六年に貴族となったヴェドマン家との間の交渉において一段と明確になる。教皇の甥に当たるドメニコ・モロシーニに娘を嫁がせようと画策するヴェドマン家では、五万ドゥカートの嫁資やさまざまな形での贈与といった好条件を提示したが、結局モロシーニが選択したのは三万ドゥカートの嫁資しかもたらしえないコルナーロ家との縁組であった。フリウーリ地方の伯家の血を引くヴェドマン家は、莫大な財力によって他国の貴族身分を有し、枢機卿をも出していたが、それでもヴェネツィア貴族においては「二流」*secondo in Ordine*」に位置づけられるに過ぎない。<sup>⑮</sup>モロシーニ家のような有力貴族にとっては、ヴェネツィア貴族としての伝統こそが重視されるのである。

このように、新家系は高位官職への就任においても婚姻関係の形成においても、ともに有力貴族層から排除されており、



たとえそれが実現できたとしても旧家系とは異なるきわめて不利な条件の下に置かれていた。それは個々の家系の持つ伝統を重視する貴族階級の論理からすればむしろ当然のことである。そもそも『隠された相違』という史料自体、身分や特権に何ら区別がないはずの貴族家系の間に厳然と存在する「隠された相違」*distanziamenti segreti*」を暴くことに執筆の動機があった<sup>⑮</sup>。この匿名の著者は、法的身分としての貴族階級確立以前にまで遡る「旧い家系」と「新しい家系」の対立から筆をおこしている<sup>⑯</sup>。数世紀を経てなお、こうした家系間の「隠された相違」は意味を持ち続けているのである。このような論理においては、「最も近年貴族に加えられた家系」とはすなわち最も威信に欠ける家系であった。ここでは貴族家系としての伝統や歴史が何よりも重要なのであって、それ以前の出自はあまり重視されない。この点については、先述の官僚出自家系の無力やヴィドマン家の位置づけを考えるとわかりやすいだろう。よって、新家系は不利を承知で高位官職の購入や伝統ある家系との婚姻関係の構築に励むのである。実際富裕な新家系の中には、すでに述べたベルレンディス家やヴィドマン家のように有力家系との婚姻関係を模索した家系がほかにもあったことが知られる<sup>⑰</sup>。しかし多くの家系はそうした経済力に恵まれず、貧困化したり断絶したりする家系も珍しくはなかった<sup>⑱</sup>。結局貴族身分獲得後も、さらなる上昇のためには破格の経済力が必要であり、「錬金術」的に急激な上昇を実現した多くの新家系には、もはやそうした余力は残っていないからである。ただし、こうした状況に甘んじざるを得なかった要因は、貴族階級の貴賤観という壁だけではなく新家系の側にもあった。再び『隠された相違』に戻ってみよう。

この筆者は、新家系の成立が貴族階級にとって、かつて「ギリシア人」と呼ばれた貧困貴族の増大を超える脅威となることを危惧していた。しかしながら、新家系の中の「よりよい者たちはより卑しい者たちを軽蔑し」、逆に「あまり尊敬されないものたちは名のあるものたちへの憎悪や嫉妬をかき立てていた」ために、新家系間に対立が生じて連帯感が生まれず、結局そうした事態には至らなかつたという<sup>⑲</sup>。その結果、新家系はそれ自体まとまった勢力となることなく、「多くのより古い貴族たちの中に埋没してしまつた」<sup>⑳</sup>のであつた。すなわち、新家系はその数に比して有力貴族の対抗勢力とは

なり得なかつたのであり、新家系創出は既存の寡頭政的な権力構造に影響を及ぼすような事態には発展しなかつたのである。「新家系」とはあくまで受容する側が設けたカテゴリーであり、貴族身分獲得の時期と手段以外には何の共通項も持たなかつた新家系は実体的な集団とはなりえず、政治勢力として全く機能しなかつたのである。

このように、家系の伝統と歴史を重んじる貴族階級の論理に直面し、さらに相互の結びつきの欠如から有力貴族層を脅かすような勢力とならなかつた新家系は、個々の経済力に応じてさらなる上昇を図るしかなかつた。結局「新家系」というレッテルが剥がされ旧家系に完全に統合されるのは、やはりサツバデーニがいうように一八世紀末まで待たなければならぬ唯一の事例として象徴的である。またサツバデーニは、この時期になるとドージェ顧問官や十人委員会委員といった高位官職も新家系に「開放」されるといふ<sup>⑥</sup>。しかし、そうした上昇を実現したのは新家系の中でもごく少数にすぎず、その多くは貴族階級の最下層にとどまつたままであつた<sup>⑦</sup>。

- ① Cowan, 'New Families', p. 72.
- ② Sabbadini, *op. cit.*, capitolo 3-5.
- ③ *Distinzioni segrete*, c. 52r-61v. Miari, *op. cit.* なお両者の間には数値の異同も少なくなく、ここではあくまで投票行動の大まかな傾向が把握されるにとどまる。
- ④ タスカ家については Miari, *op. cit.*, pp. 82-3. ベリツチョーリ家については前章註<sup>⑤</sup>。
- ⑤ カンテア戦争中に貴族身分を得た新家系のうち、貴族出自家系の賛成率は元老院で平均八四・四%、大評議会では平均七八・七%であつた。
- ⑥ ルッカ家については *ibid.*, pp. 56r-7. フォンセカ家については *ibid.*, p. 42; *Distinzioni segrete*, c. 52r.
- ⑦ 新家系の社会的出自を問わず、一六五〇年までは元老院、大評議会ともに八・九割の賛成率を維持していたが、その後徐々に低下し、一六六〇年代には元老院で八割、大評議会では七割程度の賛成にとどまつている。
- ⑧ たとえばカッティ家やボンファデーニ家など約二〇家において、元老院と大評議会との賛成率の差が一〇ポイント以上、またミネッリ家やカッセッティ家など五家程度について二〇ポイント以上の格差がある。
- ⑨ Sabbadini, *op. cit.*, p. 62.
- ⑩ *Distinzioni segrete*, c. 45r.
- ⑪ ナーニの『共和国史』には、ガイドマン家の成員の枢機卿就任、同家やファルセッティ家の軍事的功績などを記す記事がある。Nani, *op.*

*cit.*, pp. 159, 259, 560, 632 など。しかし、新家系の成員に関する記述は一般に極めて少ない。

⑫ Nani, *op. cit.*, p. 42.

⑬ *Distinzioni segrete*, c. 38v.

⑭ *ibid.*

⑮ *ibid.*, c. 39v.

⑯ 一章註⑥参照。

⑰ 都市ヴェネツィアの形成期に起源を遡りうる「旧い家系」と二二

三世紀に台頭した「新しい家系」との対立については、永井「ヴェネツィアの貴族」二〇六―七頁。

⑱ *Distinzioni segrete*, c. 43v.

#### 四 近世ヴェネツィアにおける社会的上昇

本稿ではこれまで、近世ヴェネツィアにおける社会的上昇を体现する現象として新貴族家系の成立を取り上げ、その出自や旧家系への統合過程について検討してきた。本土領の貴族、ヴェネツィアの書記局官僚、商人という新家系の出自のうち、多数を占めるのはヴェネツィア外から流入して間もないうちに「鍊金術」的な上昇を実現した「卑しい」商人層であったが、そのことは社会的上昇の場としての機能が「衰退」しつつある近世ヴェネツィアにおいても依然として失われていることを示している。

ところで、新家系の成立はカンディア戦争による財政危機が貴族身分を「開放」する形で実現したことはすでに確認した。それでは、そういう条件が整わず貴族身分の閉鎖性が厳格に維持されていた時代の社会的上昇のあり方と新貴族家系の成立では、そのプロセスや意味がどのように異なるのであろうか。こうした問題について考えることで、新家系の成立

⑲ Sabbadini, *op. cit.*, pp. 76-82.

⑳ 「隠された相違」のリストには断絶や貧困化した家系がみられる。

*Distinzioni segrete*, c. 44r, 53v, 54r, 55r, 57v など。またサッパディーニによれば、一七八〇年までに四四家の新家系が断絶していた。

Sabbadini, *op. cit.*, p. 136.

㉑ *Distinzioni segrete*, c. 47v.

㉒ *ibid.*, c. 46r.

㉓ Sabbadini, *op. cit.*, p. 136.

㉔ サッパディーニは、高位官職を歴任して有力貴族層への仲間入りを果たした新家系はわずか二六家であったとしている。 *ibid.*, pp. 136-7.

という現象を近世ヴェネツィアにおける社会的上昇や、その結果としての権力構造の変容、あるいはエリート層の再編といったより広い文脈の中に位置づけることができよう。そこで本章では、新家系成立とそれ以前の社会的上昇の主たる類型である書記局官僚層の形成過程とを比較することで、新貴族家系の創出が近世ヴェネツィア社会において持つ意義をより明確にしていきたい。

一五世紀中葉から身分資格の厳格化が進められ、最終的には三世代にわたるヴェネツィア居住と「名譽ある」職業への従事を要件とする「生まれによる市民」に就任資格が限定された書記局官僚は、次第に本来の事務的な職掌から機能を拡大させ政治的影響力を強めていった<sup>①</sup>。また国政を担う有力貴族との結びつきも深く、そうした点から新家系の中でも好意を持って迎えられたことはすでに述べたとおりである。そこで、まず社会的上昇のプロセスや方向性について比べてみよう。

二章で明らかにしたように、書記局官僚出自家系は新貴族のカテゴリーのひとつをなしていたが、それは市民身分に属する官僚から貴族へという直接的な上昇のプロセスを示している。しかし、より重要なことは官僚家系の出自である。新家系と同様に、書記局官僚家系もその起源をたどれば都市外の商人に辿り着くことは少なくない。たとえば『隠された相違』に付されたリストによれば、一六九四年に貴族身分を得たガツリ家は、皮革商を営んでいた父親に対し、その息子たちは「天賦の才に恵まれ、名譽ある秘書官の職に従事し」ていた<sup>②</sup>。商人から官僚へという上昇の典型的な例であろう。こうした過程は新貴族家系成定期にとどまらず、一五世紀後半以降の書記局官僚層の形成期においても指摘できる。よって官僚家系による貴族身分の取得は、商人から官僚へという従来の上昇プロセスが貴族身分の「開放」によって延長された、連続する過程として捉えられるのである。しかも表1において官僚出自家系に分類された新貴族のうち、一六世紀前半まで遡って書記局官僚であったことが確認できるのは、すでに紹介したオットボン家やフランチェスキ家などわずか三分の一（一五家中五家）しかない<sup>③</sup>。逆に言えば、官僚出自である新貴族家系の多くは一六世紀後半以降新たに官僚層へ進出し

た家系だということになる。商人から官僚へという上昇プロセスは、ヴェネツィアにおいて近世を通じて機能していたのである。

このように考えると、新貴族の主体となる「卑しい」商人家系の存在は、都市外の商人がヴェネツィアに定着し、経済的な成功を収めるとともに名譽や威信の蓄積を図るという社会的上昇過程を、いわば「縮約」したものとして捉えることができる。本来ならば数世代にわたって徐々に達成されるプロセスをわずかに、二世代のうちに実現したのは、いうまでもなくカンディア戦争による財政危機という特殊な状況であった。よって、「卑しい」商人の「錬金術」的な上昇に対する激しい嫌悪は、この上昇過程が十分な時間をもってなされず、縮約された形で一気に実現したことへの反発として受け取られるべきだろう。

新家系成立に示される社会的上昇の方向性が書記局官僚層の形成過程と類似性や連続性をもつ一方で、両者の間には相違点を見出すことができる。それは地理的出自の中心の移動である。書記局官僚層の形成過程における地理的出自について詳細に分析することは難しいが、おそらく東地中海方面からヴェネツィアに移ってきた家系が大きな割合を占めると推測される<sup>④</sup>。それに対して、表2で示した新貴族家系の地理的出自の中心は、ヴェネツィアの本土領にあるといえる。このことは、地中海商業において重要な役割を果たした国際的な海港都市としてのヴェネツィアから、ヴェネト地方の地域中心的な都市へという位置づけの変化を示すものとして興味深い。ここでこの問題を詳細に論じる余裕はない。ただ本土領の中でもベルガモ出身家系が多く、逆にヴェローナやヴィチエンツァといった比較的大きな都市からの移動が少ないことは、近世ヴェネツィア共和国の領域構造を考えるうえで示唆的である。社会的上昇の場として都市をみる視角は、こうして背後に広がる領域全体を問うことを促すのである。

書記局官僚層の形成と新貴族家系の成立の間にみられる相違点は、それぞれがヴェネツィアの身分制秩序や権力構造に与えた影響について考えたとき、より顕著な形で現れてくる。前章でみたように、新貴族家系の成立は既存の寡頭政的な

権力構造に何ら影響を及ぼさなかった。新家系は相互の連帯を欠いており、まとものある政治勢力とはなりえなかったからである。これに対して、書記局官僚層の形成は貴族階級における寡頭政化の進展と連動して権力構造における一定の変化を促した。政治の実務に通じた上層官僚層は、有力貴族と結びつくことで政治の実力を蓄積し、国政上重要な役割を果たすようになったからである。<sup>⑤</sup> 貴族アントニオ・ロレダンが「こうしてわれわれの最高機密は、いかなる貴族よりも彼ら（十人委員会秘書官）のほうがよく知っている」と述べたことは、<sup>⑥</sup> こうした事情を端的に物語っている。また有力貴族と上層官僚との緊密な結びつきは、権力から排除される貧困貴族層の反発を招き、それが一五八二年からの十人委員会改革をもたらし一因ともなる。<sup>⑦</sup> すなわち、書記局官僚層の形成は上層市民としての「生まれによる市民」身分の確立を促したとはいえ、貴族身分の閉鎖性を打破しえず、その意味で身分制秩序に大きな変化をもたらしえなかったという限界は認められるが、その一方で権力構造の変容を実現した現象として意義づけられるのである。それに対して、新貴族家系の成立は約三世紀ぶりに貴族身分の閉鎖性を打ち破る画期的な出来事でありながら、寡頭政的な権力構造への影響はほとんど看取し得ない。そこに両者の最も大きな違いがある。そしてこの違いをもたらしたのは、社会的上昇の到達点としての官僚と貴族身分の性質の相違である。

書記局官僚の場合、官僚としての職分とその前提をなす「生まれによる市民」という身分がともに分かちがたく結びついている。<sup>⑧</sup> しかも政治的実力と経済的利益をもたらす上層官僚のポストには限りがあり、そのため有力な官僚家系は公私にわたって互いに結びつきを強め、一つの実体的な社会層を形成していた。<sup>⑨</sup> しかしながら、戦争を契機に貴族身分を得た新家系の間には集団形成の核となるべき共通の利害関係がない。貴族身分獲得後は家系の伝統を重視する貴族階級の論理に直面して「古い貴族の中に埋没してい」ったことは前章でみたとおりであり、そこから抜け出すには不利を承知で高位官職に就任し伝統ある有力家系とのつながりを模索するしかなかった。職分と身分が密接に結びついた官僚と、特定の官職や利害と直接には結びつかない貴族とのこうした違いが、結果として官僚層の形成と新家系の成立に異なる意義をもた

らしたのである。

さらに、書記局官僚層の形成から新貴族家系の成立に至る一連の流れを、近世ヴェネツィア社会におけるエリート層再編の過程として捉えたとき、そこに新家系成立という現象のもつ限界をみることができる。それはまず「都市」としてのヴェネツィアにおいて、新たに台頭してきた書記局官僚層を完全に解体し貴族身分に編入することができなかつたという点である。そのため、同じ原理のもとに統合された単一の政治エリート層を形成することができず、貴族と市民たる官僚という二元的な身分構造と、有力貴族と書記局官僚が密接に結びついて貧困貴族層と対峙するという「ねじれた」権力構造はついに克服されなかつた。しかも「錬金術」的な上昇を実現した商人層を貴族身分に吸収したことは、一時的にせよ都市社会における今後の上昇的な動態の可能性を摘み取ることになってしまった。『隠された相違』の筆者が、新家系の成立によって有力官僚が貴族となり、高額の資本が国庫に拠出されたことで、官僚層の質的低下と都市経済の疲弊を招いたと指摘していることは、すでに同時代においてそのことが意識されていたことを示すものとして興味深い<sup>⑩</sup>。

また視線を「都市」としてのヴェネツィアから「領域国家」としてのヴェネツィアへと転じてみると、そこにも同様の限界を指摘することができる。それは、新家系の成立がヴェネツィアの支配下にある各地域や都市の伝統的な支配層の解体とヴェネツィア貴族への統合をなしえなかつたということである。その結果、地方のエリート層を中央のエリート層に統合し、その上昇のプロセスを保障するような恒常的なシステムがヴェネツィアには最後まで欠如することとなった。こうした点からは、近世ヴェネツィアにおける国家や領域統合の問題が射程に収められることになろうが、それらについては今後の課題としたい。

① 拙稿「書記局官僚層の形成」参照。

② *Distinzioni segrete*, c. 58r.

③ 一六世紀半ばまでの書記局官僚については、M・ネフによるリストがあり、それと書記局官僚出自の新貴族家系を対応させることで、官

僚家系の連続性を推測することができる。ネフの官僚リストは、

Neft, *Chancery Secretaries*, pp. 348-599.

④ 拙稿「書記局官僚層の形成」五九頁。

⑤ 同、二一四章。

- ⑨ Venice : *A Documentary History, 1450-1630*, Chambers D. and Pullan, B., (eds.), Oxford and Cambridge (Mass), 1992, p. 270.  
 ⑩ 拙稿「十人委員会改革」三頁、および「はじめに」註13。  
 ⑪ *Distinzioni segrete*, c. 45v.

おわりに

外に向かつての「開放性」と共同体の内における「閉鎖性」という都市の「二面性」を結ぶ現象として「社会的上昇」を位置づけ、そのプロセスに着目することで近世ヴェネツィア社会を捉え直す。そうした視点に立って、本稿ではヴェネツィア貴族階級における新家系の成立について検討してきた。その結果、一三八一年以来となる貴族身分の「開放」によって、本土領の貴族やヴェネツィアの書記局官僚、そして商人がヴェネツィア貴族の身分を獲得して社会的上昇を実現したこと、しかもその主流をなすのは、「鉄を金に変える」ような急激な上昇を果たした、本土領を中心とする都市外の商人であったことが明らかとなった。

しかしながら、権力構造への影響という点から考えたとき、この現象が持つ意義は決して大きくはない。それは、新貴族家系の成立を促した要因がヴェネツィア社会に内在的なものであったというよりも、むしろカンディア戦争による財政危機という外在的なものであり、しかも多くの貴族の反対を押し切ってこの政策を実現したのは、権力を握る有力貴族層であったからである。その意味において、これは近世ヴェネツィアの寡頭政的な権力構造を如実に反映した政策であったといえる。さらに、戦争の終結とともに実質的に新家系の創設も途絶したことで、書記局官僚層の形成からの一連の現象をエリート層再編過程として捉えた場合にも、そこに大きな限界を指摘せざるを得ない。それは、都市と領域国家の両面において、ヴェネツィア貴族に次ぐエリート層の解体と、単一の統合された支配層の形成が実現されなかったという点にある。都市においては貴族と市民身分に属する官僚、また領域国家においてはヴェネツィアの貴族と本土領の貴族という



二元的な構造は、結局一八世紀を通じて存続し、両者を結ぶ恒常的なシステムはついに構築されなかった。

このように、近世ヴェネツィアにおいては、エリート層の再編が大きな構造変化を促すことなくフランス革命やナポレオン率いるフランス軍の衝撃と、それともなう共和国の崩壊を迎えることとなるのである。それは、君主国化したフィレンツェやロンバルディア諸国において、「上からの」改革であれ、あるいは時間の経過につれて実質的に進行した性格の変化であれ、何らかの形で看取しえるようなエリート層の再編過程と比較したとき、伝統的な政体を維持し続けた共和国ヴェネツィアの限界として認識されるべき問題であるのかもしれない。また硬直化した権力構造の存続は、一八世紀のいわゆる啓蒙主義的な改革がヴェネツィアではほとんど試みられなかったことを説明する要因のひとつであるのかもしれない。とはいえ、それは近世ヴェネツィア社会そのものの硬直化を意味するものではないだろう。そうした権力構造に由来する限界を抱えながらも、商人層を中心として社会的上昇が実現されていたこと、しかもそれは、少なくとも書記局官僚層の形成過程から連続した、近世ヴェネツィア社会を貫く現象であったことにのみた通りである。またそうした社会的上昇が、官僚層の形成や貴族身分の「購入」という形で実現されていたことは、ヴェネツィアのみならず他のイタリア諸国や近世ヨーロッパに広く共通する現象であろう。こうした比較史的な考察の中でヴェネツィアの近世をより広い文脈の中に位置づけることは、国家としてのヴェネツィアの領域統合の問題とともに今後の課題とせざるを得ない。しかしながら、そうした作業を通じて、単に衰亡する伝統的な中世都市国家としてだけでなく、ヴェネツィアの近世を問う意義もまた、より明確にされていくのではないだろうか。

【本稿は、平成十三年度文部科学省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。】

represented a continuing source of political tension. Nevertheless, after the defeat of the retired emperor's forces in the *Kusuko* 薬子 rebellion in 810, the emperor came to monopolize use of these seals. Ultimately, however, with the destruction of the *ritsuryo* order and the creation of a private imperial secretariat, caused the *Rei-in* to lose its significance. The death of the *tenno Shotoku* 称徳, in 770, and the absence of a designated heir to the throne, proved instrumental in causing the *Rei-in* to decline in importance, as the ministers of state gained for the first time the power to use the imperial seal, which meant that it could no longer be exclusively used by emperors.

## The Expansion of the Early Modern Venetian Patriciate

by

TONAI Tetsuya

In 1646, new families were aggregated to the Venetian patriciate, which had been a closed entity for nearly three centuries. This article investigates how the addition of these newcomers to the ruling class influenced the power base and social mobility of early modern Venetian society.

Although many members of the patrician Great Council opposed this aggregation, Venetian leaders, pleading an extraordinary need for revenue to finance the war of Candia against the Turks, persuaded them to offer this status and its ensuing privileges to each applicant who paid the princely sum of 100,000 ducats to the government. This expanding patriciate reflected the oligarchical nature of Venetian politics, and the newcomers were given the lowest possible place, and excluded from all influential council posts. These new families arose from the following groups : the nobility of *Terraferma*, Venetian territory in the Italian peninsula ; chancellery secretaries belonging to *cittadini originari*, citizens by birth ; and merchants. *Terraferma* nobility and chancellery secretaries were welcomed into the patriciate, but the old families reserved special opprobrium for immigrant merchants who had amassed wealth through 'vulgar trades,' just like alchemy.

In spite of this distinction, chancellery secretaries and merchants arose from similar social strata. Most chancellery secretaries came from merchant families.

Hence this process of social mobility represented a continuation of fifteenth-century practices. Nevertheless, a geographical distinction can be drawn between the two groups. Most of the older secretaries originated in the east Mediterranean coastal areas of the Venetian territories, while most of the new merchants arose from *Terraferma*. Thus, one can say that Venice shifted from being an international maritime city to one more insular in character, centered in the Veneto.

The reorganization of the elites of early modern Venice limited, however. The duality of the ruling structure, with the patrician oligarchy supported by bureaucratic secretaries remaining members of *cittadini*, unchanged. Likewise, within the regional state of Venice, the Venetian patriciate failed to aggregate *Terraferma* nobility as a whole. Venetian leaders missed a chance to create a unified elite until the end of the Republic.

Marine Police and Port Laborers :  
Reflections on the London Port Riot of 1798

by

HAYASHIDA Toshiko

The port of London witnessed great prosperity late in the eighteenth century, as a result of rapidly expanding overseas trade, and a concurrent increase in size and number of ships. This expansion in trade outstripped available storage facilities, which caused the pilfering of goods stored at wharves and warehouses to become endemic.

Patrick Colquhoun, a stipendiary magistrate of the London police court, received an offer from West India merchants to fund 75% of his operating expenses if he were to establish a force to guard their cargo stored at the port of London, and he duly founded the Marine Police in July 1798. Shortly thereafter, in October 1798, the Marine Police was attacked by a body of men known as coal-heavers responsible for unloading coal-ships, and two men were killed. The riot was suppressed by the army and a ringleader was convicted of the aiding and abetting of the murder. This represents the first anti-police riot in English history.

The aim of this paper is to reconstruct the 1798 riot by making full use of